

タイワンツバメシジミ ■ 絶滅危惧Ⅰ類
Everes lacturnus



オオルリシジミ ■ 絶滅危惧Ⅰ類
Shijimieoides divinus



シルビアシジミ ■ 絶滅危惧Ⅰ類
Zizina emelina



チョウが消えてゆく

～チョウをシンボルに自然環境を守る～

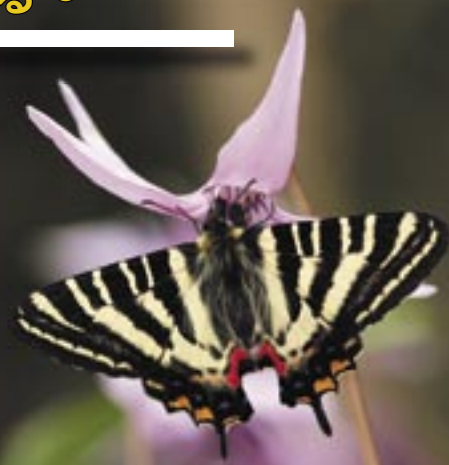
ミヤマシロチョウ ■ 絶滅危惧Ⅱ類
Aporia hippia japonica



オオウラギンヒョウモン ■ 絶滅危惧Ⅰ類
Fabritiana nerippe



ギフチョウ ■ 絶滅危惧Ⅱ類
Luehdorfia japonica



チョウセンアカシジミ ■ 絶滅危惧Ⅱ類
Coreana raphaelis yamamotoi



オガサワランシジミ ■ 絶滅危惧Ⅰ類
Celastrina ogasawaraensis



ヒョウモンモドキ ■ 絶滅危惧Ⅰ類
Melitaea scotosia



ヒメヒカゲ ■ 絶滅危惧Ⅰ類
Coenonympha oedippus



ウスイロヒョウモンモドキ ■ 絶滅危惧Ⅰ類
Melitaea protomedia



オオイチモンジ ■ 絶滅危惧Ⅱ類
Limenitis populi jezoensis



日本チョウ類保全協会

ギフチョウ

写真：秋元俊夫

桜の花が咲けば、ギフチョウの季節
風薫る谷間にはミヤマカラスアゲハ
季節を刻みながら、いつもの場所に
あざやかな翅をひらめかせて

カレンダーのなかったころ
畑をたがやす人々は
木々の芽吹き、鳥のさえずり
そしてチョウの姿に
季節を知り、時の流れをはかった

いのち
小さな生命が語りかける

しぜんかい
自然界の静かな変化を

風景は変わりゆく
環境も人のくらしも変わる
向かう先はどこなのか



快適なくらしは、これからも続くだろうか
小さな生命が、小さな異変を告げている
そう、いつのまにか
季節を告げるいくつもの使者たちが
姿を消してしまった
人々から忘れられ
快適さを求める生活の波に呑まれて

いま、私たちに何ができるだろう
チョウのために
木々のために
人々がいつまでも豊かにくらすために

多くのチョウが絶滅の危機



環境省レッドデータブック昆虫類
2006年発行

絶滅の危機にある野生生物とレッドデータブック

自然環境の変化とともに、今、多くの野生生物が減少しています。こうした絶滅の危機にある野生生物の状況を知るために、「レッドデータブック」という本が発行されています。

環境省による国レベルのレッドデータブック（RDB）では、国内で絶滅した動植物は、すでに102種（動物47種、植物55種）にも上り、さらに、絶滅のおそれのある種類として、動物約700種、植物約2,000種があげられています。

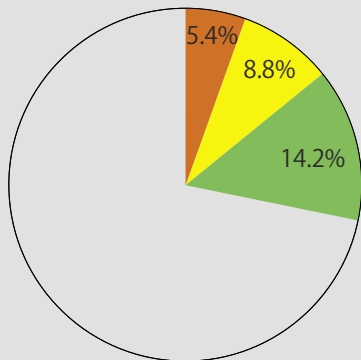
また、都道府県別の状況をまとめた都道府県版レッドデータブックも発行されており、絶滅の危機にある野生生物を、地域ごとに、より細かくリストアップしています。

チョウの28%が絶滅の危機!?

日本には約240種類ものチョウ類が生息していますが、環境省の最新版レッドリストに載っているのは68種で、何と、全体の約28%にあたります。

右ページで、特に減少してしまったチョウを紹介しました。オオウラギンヒョウモンやヒョウモンモドキは減少したチョウの代表例で、ともに、ほとんどの場所から絶滅してしまいました。自然豊かなイメージのある東北地方や中部地方でさえ、これらのチョウは生き残っていないのです。

レッドリストに載っていない種類のなかにも、地域的に減少している種類が数多くいます。また、レッドリストに載った種類は、今も年々減少が続いており、対策をとらなければ、近い将来に絶滅する危険性があります。



絶滅の危機に瀕するチョウの割合

- **絶滅危惧Ⅰ類**：絶滅の危機に瀕しているもの
… 13種
- **絶滅危惧Ⅱ類**：絶滅の危険が増大しているもの
… 21種
- **準絶滅危惧**：現時点では絶滅危険度は小さいが、
存続基盤が脆弱なもの
… 34種

※ここでは、日本のチョウを240種として計算し、亜種ごとに複数のカテゴリーに入っている種類は、下位のカテゴリーを使用しています。

絶滅の危機にある草原のチョウたち

それでは、どのようなチョウが減少しているのでしょうか？ ほとんどのチョウが多少なりとも減っている中で、もっとも減少したのは、草原にすむチョウたちです。かつて人間が生活するために利用していた草地（茅葺き屋根や肥料、家畜の飼料等に利用）は、近年、必要がなくなり、急激に失われてきました。

チョウが消えつつあるのは、このように人間の生活スタイルの変化にともなっているのです。



オオウラギンヒョウモン

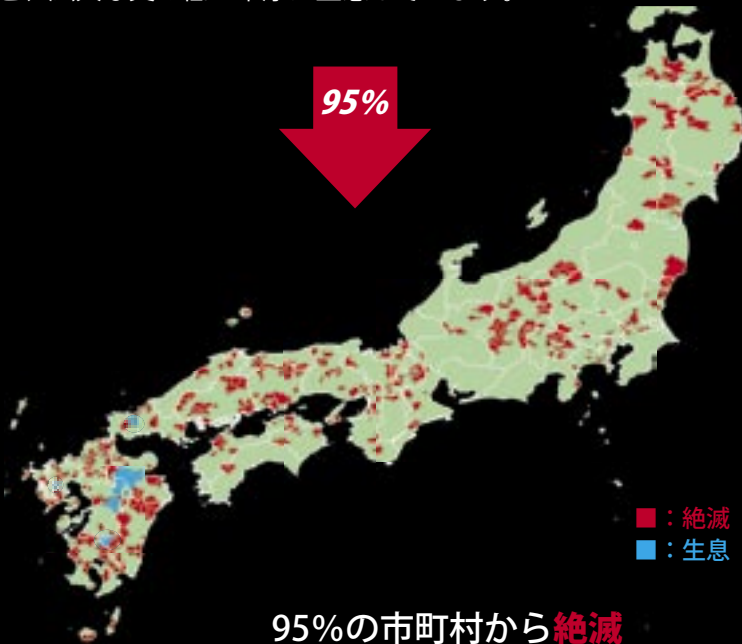
Fabriciana nerippe

■ 絶滅危惧Ⅰ類

日本でもっとも減少したチョウ。本州、四国、九州各地に生息していましたが、現在、四国では絶滅、本州、九州にわずかな生息地が残っているのみです。幼虫はスミレなどを食べ、山口県の秋吉台や熊本県の阿蘇、自衛隊の演習場など、広大な丈の低い草原に生息しています。



生息地の草原（山口県秋吉台）



ヒョウモンモドキ

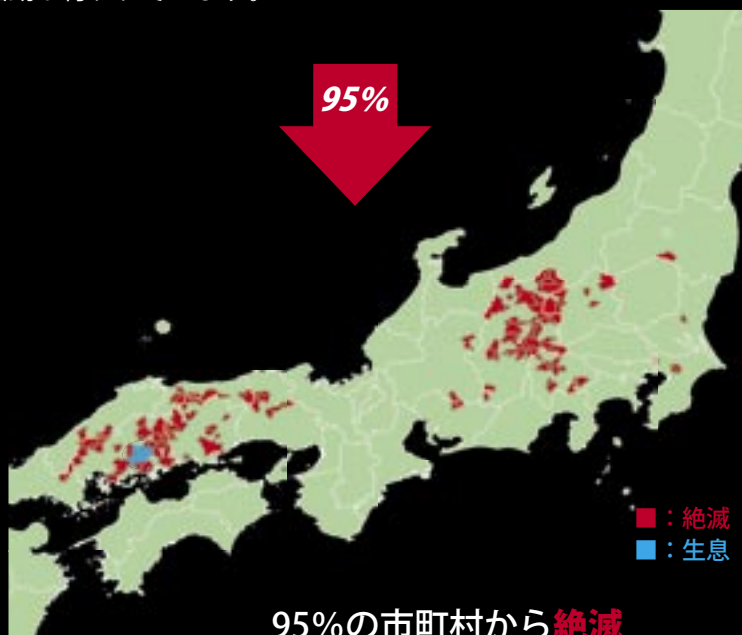
Melitaea scotosia

■ 絶滅危惧Ⅰ類

これまで本州の14県に生息していましたが、広島県を除き、絶滅してしまいました。幼虫はキセルアザミやタムラソウを食べ、天然の湿地や放棄田に生息しています。広島県では、山間の小規模な湿地帯にわずかに残っており、保全活動が行われています。



生息地の湿地化した放棄田（広島県三原市）



チョウが減少した原因

生物多様性とその危機

「生物多様性」という言葉が最近よく使われています。これは、

- ① 種内の多様性…… 同じ種でも地域によって少しずつ異なるような遺伝的な多様性があること
- ② 種間の多様性…… さまざまな種類の生物がいること
- ③ 生態系の多様性…… 森林や草原、河川などのようにさまざまな環境があること

を表現しています。

わが国では、「生物多様性国家戦略」を策定し、この生物多様性に関する現状や問題点、それを守っていくための取り組みについて方向性を定めています。

現在、生物多様性は危機に直面していますが、この現状を、「生物多様性国家戦略」では、大きく以下の4つの危機にまとめています。

- | |
|---|
| 第1の危機 ：開発、汚染、乱獲、過剰利用などの人間活動にともなう影響 |
| 第2の危機 ：里山の荒廃などの人間活動の縮小や生活スタイルの変化にともなう影響 |
| 第3の危機 ：外来生物や化学物質などの人間活動によって新たに問題となっている影響 |
| 地球温暖化による危機 ：地球温暖化の進行が、生物多様性に与える影響 |

豊かな自然環境が失われてきました

チョウの減少の原因は、大きく、右ページの4つにまとめられます。

特に、人々の暮らしの変化による自然の利用方法の変化によって、草原や雑木林にすんでいた身近なチョウたちが急激に減少してきました。こうしたチョウの減少は1960年代より全国的に起こり始め、1970～1980年代には大きく顕在化し、チョウがすむ豊かな自然環境は次々に失われてきました。そして現在、草原や林が一見残っているように見える場所でも、チョウの種類や個体数はめっきり減っています。

チョウを通して自然を見れば、いかに多くの生き物がいなくなったのかに気づきます。

分布域を広げるチョウたち

たくさんのチョウが減少している一方で、ごく少数ですが、地球温暖化による気候の変化や、その他の人間活動によって、分布を広げているチョウもいます。

ナガサキアゲハ、ムラサキツバメ、ツマグロヒョウモン、クロコノマチョウなどは、かつて関東地方では見ることができませんでしたが、今では、各地で見かけるようになりました。



ナガサキアゲハ



ムラサキツバメ



ツマグロヒョウモン



クロコノマチョウ

■ 開発による生息地の破壊

- ・道路、ダム、ゴルフ場、スキー場、キャンプ場、農地、宅地、工業団地、別荘地、公園などの開発によって、数多くのチョウの生息地が消滅しました。
- ・特に1980年代以降、影響が顕著となり、1987年に制定された総合保養地域整備法（リゾート法）はさらに全国的に自然破壊を促進しました。
- ・環境アセスメント法が1999年に施行されてから、開発の際、動植物に配慮されるようになってきました。



道路建設による森林の破壊

■ 里山の変化

- ・山では、木々を薪に、落葉を肥料や燃料に利用していましたが、人々の生活が大きく変化し、石油や化学肥料がこれらにとって代わり、雑木林は手入れされなくなりました。
- ・昔は茅（ススキのこと）を茅葺き屋根や肥料、家畜の敷きわらなどに利用し、集落には必ず茅場（草原）がありました。こうした場所がなくなりました。
- ・農薬・除草剤などが利用されるようになり、環境に悪影響を与えてきました。



里山の景観

■ 森林伐採および植林

- ・森林伐採およびスギ・ヒノキ・カラマツ等の植林は、多様な植物が生える天然林を、単調な林へと変え、それとともに豊かな自然環境が大きく減少しました。
- ・特に、1960年代からは高度経済成長にともない、木材（住宅材等）の需要に応えるため、天然林を伐採し、人工造林を推進した拡大造林政策が行われました。
- ・林道の建設や、林道周囲の崖の吹きつけなども悪影響を与えています。



生長した人工林

■ 外来種の侵入による影響

- ・河川堤防や農耕地周辺、住宅地周辺などでは、外来植物（セイタカアワダチソウなど）が広がり、在来の植物が駆逐されつつあります。
- ・小笠原の固有種オガサワラシジミは、外来生物のトカゲであるグリーンアノール（北アメリカ原産）に食べられたり、食樹が外来植物に覆れたりして、絶滅の危機にあります。
- ・外来生物法が制定され、国レベルでも外来種対策が始まりつつあります。



セイタカアワダチソウが優占する河川の草地

■ その他

- ・少なくなったチョウの過度の採集
- ・気候変動による植生の変化
などもチョウ類の減少要因となっています。

チョウをシンボルとした自然環境の保全

草原のチョウたちを守る



チャマダラセセリ



ウスイロヒヨウモンモドキ



ゴマシジミ



ホシチャバネセセリ



草刈りと火入れによって維持されている草原（長野県開田高原）

草原は、昔から採草地や放牧地として、牛馬のえさや敷きわら、田畑の肥料、茅葺き屋根の茅（ススキ）などを得るために利用されてきました。天然の草原がこうした人為によって拡大してきた場所には、キキョウ、ワレモコウ、オミナエシなど、たくさんの種類の野草が生え、草原性のチョウが生息しており、「半自然草原」と呼ばれます。こうした草原は、草刈りや火入れによって維持されてきましたが、草の需要がなくなるとともに、森林へと遷移してしまい、草原にすむチョウたちも急激に減少してきました。草原にすむチョウには、絶滅しないよう、緊急に保全に取り組まなければならない種類が数多くあります。

森林のチョウたちを守る



オオムラサキ



ヒメギフチョウ



ウラジロミドリシジミ



定期的な伐採で維持されているコナラ林（岐阜県関市）

森林には、気候や立地によって、アカマツ・コナラ林、ブナ・ミズナラ林、シイ・カシ林など様々なタイプがあり、それぞれに異なった種類のチョウが生息しています。里山の雑木林は、10～20年ごとに定期的に木が伐られ、炭や薪として利用されてきたため、「薪炭林」と呼ばれます。こうした雑木林では、春に林床まで光が届くため、カタクリやスミレなどの春植物がみられ、多くのチョウの生息地となっています。森林にすむチョウは、開発や植林などによる破壊や、管理放棄による環境の変化によって減少してきました。草原性のチョウほど深刻ではない種類も多いのですが、多くの種類が全国的に激減する前に、対策を立てる必要があります。

チョウの保全は環境の保全

減っているチョウを飼育して増やし、野外に放しても、チョウは守れません。生きるために必要な条件が欠けることのないように、自然環境全体を守っていく必要があります。

チョウは種類によって、すみかも食べ物も変わります。つまり、いろいろな種類のチョウを保全することは、そこにすむ多くの動植物を守ることもつながるのです。さらに、森林や草原、里山など、多様な環境を保全してゆくことにも発展します。それは、人間の生活環境を守ってゆくためのバロメーターでもあるのです。

チョウを守る取り組み



生息地の管理作業：草刈りによって生息地の草原を維持する



観察会：チョウを入りに、地域の自然を住民とともに理解する



生息地を示す看板：その場所の重要性を人々に周知する



生息状況の調査：正確な個体数を把握し、次の方策を考える

- 全国各地で、さまざまなチョウを守る取り組みが行われています。
- 草原性のチョウには危機的な種類が多く、生息環境を維持するために、草刈りなどの管理作業が実施されています。
- 地域の方々の理解と協力を得るために、広報・啓発活動が積極的に行われています。観察会や講演会の開催の他、子どもたちを対象とした環境教育を行っているところも多くあります。
- 生息状況が絶えず変化していることから、チョウの個体数のモニタリングが毎年行われ、その動向が確認されています。そして、その結果が次の保全活動に活かされています。
- 一度絶滅してしまった場所では、科学的なデータに基づきながら、再導入する試みも慎重に行われています。
- 農林水産省の主催で行われている「田園自然再生コンクール」では、広島県でヒョウモンモドキの保全活動をしている「ヒョウモンモドキ保護の会」や、長野県のオオルリシジミの保全団体「北御牧のオオルリシジミを守る会」が受賞するなど、チョウを通じた地域の活動は、全国的にも高い評価を受けています。
- 日本チョウ類保全協会では、チョウの保全を考える全国イベント「全国チョウ類保全シンポジウム」を各地で開催しています。

何ができるだろう？

なぜチョウを守るのか？

1 チョウは自然環境のなかで、役割をもっています

チョウも含めて生物は、生態系というひとつのつながりの中で関わり合い、それぞれが生きています。一つ一つの種類がそれぞれ生きていけることが、豊かな自然を守る上で大切なのです。

2 チョウは人にさまざまな恩恵を与えてくれます

チョウをみて美しいと感じたり、チョウを眺めることが好きな人も大勢います。チョウは人にこうした恩恵を与えてくれるほか、モンシロチョウから癌の治療に有用な成分が見つかるなど、それぞれの生き物はさまざまな可能性を持っているのです。

3 チョウは自然環境の指標としてわかりやすいものです

チョウは他の昆虫や動物と比べても目に付きやすく、調べやすいものです。そのため、自然の変化を知るためのものさしとなります。

どのようにチョウを守っていくべきか？

「チョウの絶滅を防ぐ」

日本では、これまで絶滅したチョウはいませんが、その一歩手前のものはいくつもいます。まずは、日本から絶滅するチョウがないよう、危機的なチョウを何とかして守っていく必要があります。そのためには、地域ごとにより細かな単位で守っていくことが必要でしょう。

「チョウが見られる環境を維持したり、復元したりする」

現在、身近に残っている自然を守っていくことはとても大切です。身近な自然に目を向け、そうした環境が維持できるように、また失われつつある環境を復元できるようにしていくことが必要です。

一人一人に何ができるだろう？

近年さまざまな地域で、里山やそこにすむチョウを保全していく活動が活発になっており、みなさんのご協力を必要としています。活動へのご参加・ご協力をお願いいたします。

◆ チョウを調べたり、観察してみませんか？

「何種類チョウの名前を知っていますか」と聞かれて、いくつ頭に思い浮かぶでしょうか？ モンシロチョウ、モンキチョウ、アゲハチョウ、カラスアゲハ・・・。毎日の生活の中では目に触れなくても、実は身のまわりにも数十種類のチョウが暮らしています。彼らの名前が分かると、新しい世界がひろがります。例えば、一匹のチョウに季節の訪れを感じたり、あるいは、幼虫のえさを知ることで、植物の知識も深まります。小さな図鑑を片手に、チョウの名前を調べてみませんか？

◆ チョウや自然を守る活動が始まっています

日本には今にも消えていってしまいそうなチョウたちがたくさんいます。日本チョウ類保全協会ではそんなチョウたちを後の世代に残していけるように活動しています。でもまだ活動は始まったばかりです。これから活動の輪を広げていくには、ぜひ皆さんの力が必要です。チョウのために、あるいは私たち自身が暮らす環境のために、何かできることはないでしょうか。一緒に考えていきませんか？

日本チョウ類保全協会とその活動

Japan Butterfly Conservation Society

日本チョウ類保全協会では、チョウを自然環境のシンボルとして、豊かな自然環境を後世に残すために、いろいろなチョウがすめる自然環境の保全を進めています。

主な活動内容

- チョウ類保全のための活動
 - ・チョウ類に関する調査の実施・保全の提案
 - ・チョウ類の生息地の保全活動
 - ・地域保全団体の設立・活動・保全方法に関する各種協力・アドバイスの実施
 - ・チョウ類の保全に関する情報の交換や会合の開催
- チョウ類保全に関する普及啓発活動

入会方法

趣旨にご賛同いただける方なら、どなたでもご入会いただけます。

- 会員になると、
 - ・ニュースレター（会誌）をお届けします（年2回）
 - ・メーリングリストにご参加いただけます。
 - ・各種チョウ類保全の調査や保全活動、シンポジウムへのご案内をいたします。
 - ・その他、チョウ類保全に関する情報収集のお手伝いや保全に関するご相談を随時受け付けております。
- ご入会の際には、郵便局にて、下記郵便振替口座に会費をご納入ください。その際、会員種別、入会年度、氏名、住所、電話番号、e-mail等を振替用紙にご記入ください。
- 折り返し、ニュースレターをお送りいたします。
- なお、会計年度は、1月1日～12月31日です。
- ・郵便振替口座
加入者名「日本チョウ類保全協会」 口座番号 00860-5-148107

○会員種別

会員種別	会員資格	年会費	会誌の有無
正会員	個人および団体。総会での議決権あり	5,000円	あり
普通会員	個人。総会での議決権なし	2,000円	あり
子ども会員	18歳以下の個人	500円	あり
家族会員	正会員の家族の方	500円	なし
個人賛助会員	事業を賛助する個人	10,000円	あり
団体賛助会員	事業を賛助する団体（法人）	30,000円	あり
法人特別会員	本会を特別に支援する法人	100,000円	あり

～ご参加・ご協力・ご支援をお願いいたします～



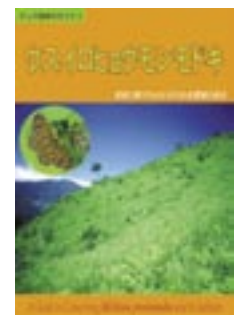
毎年2月に行われる「チョウ類の保全を考える集い」



全国チョウ類保全シンポジウム (2007年1月)



ニュースレター：チョウ類保全 NEWS



ウスイロヒヨウモンモドキ 保全ガイド

チョウが消えてゆく～チョウをシンボルに自然環境を守る～ Endangered Butterflies and their Conservation in Japan

発行日：2009年3月29日
 執筆・編集：JBCS 編集部（中村康弘・永幡嘉之） デザイン：中 敦郎
 発行者：特定非営利活動法人 日本チョウ類保全協会（JBCS）
 この冊子に掲載の原稿、写真、図版を問わず、その全部または一部の無断転載を禁じます。
 写真協力：秋元俊夫、岩見潤治、梅村三千夫、大塚喜久、小田高平、加藤良平、川野雅喜、左合直、清水敏道、菅井忠雄、杉浦宗規、立岩幸雄、田中和良、津田増夫、鶴藤俊和、戸苺淳、永幡嘉之、中村康弘、増田勝弘、松實孝裕、三輪成雄、山本昭良

特定非営利活動法人 日本チョウ類保全協会 Japan Butterfly Conservation Society (JBCS)

事務局
 〒140-0014 東京都品川区大井 1-36-1-301
 TEL：080-5127-1696
 Email：butterfly-conservation@japan-inter.net
 URL：http://www.japan-inter.net/butterfly-conservation/



本冊子の一部は、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けています。



大豆油インクを使用しています



古紙配合率100%再生紙を使用しています

み ちか
身近なチョウ～人家周辺、公園、野山などでよく見られるチョウ～



キアゲハ
Papilio machaon hippocrates



ナミアゲハ
Papilio xuthus



クロアゲハ
Papilio protenor



アオスジアゲハ
Graphium sarpedon



キタキチョウ
Eurema mandarina



モンキチョウ
Colias erate poliocephalus



モンシロチョウ
Arctogeia rapae erasivora



スジグロシロチョウ
Arctogeia melale



ウラギンシジミ
Caretis acuta paracuta



ベニシジミ
Lycæna phlaeas daimio



ヤマトシジミ
Pseudostegeria maha



ツバメシジミ
Everes argades



ツマグロヒョウモン
Angyreus hyperbitus



コムスジ
Neptis sappho intermedia



キタテハ
Polygonia c-aureum



ヒメウラナミジャノメ
Ypthima argus



クロヒカゲ
Lethia diana



サトキマダラヒカゲ
Neope goshkevitschii



ダイミョウセセリ
Daimio telhys



イチモンジセセリ
Parnara guttata